

イギリス第2波フェミニズムと女性の聖性を取り戻す運動 Women's Movements for Reclaiming Female Sacrality in the Second Wave Feminism in Britain

小松 加代子

Kayoko Komatsu

要旨: 宗教的な概念や経験に関わる女性たちの複雑で多様な生き方の中には、フェミニズムと宗教が深くかかわっている場合が見られる。本稿では、1970年代から80年代のイギリス第2波フェミニズムの時代において、女性解放運動がフェミニストの信念の独特な進化をうながしたとされる女性の新しい宗教的な在り方の例として、イギリスにおける母系制社会グループとグリーンナムコモン平和運動を取り上げる。宗教的な組織の文脈に疑義を提示しながら自ら宗教的文脈を作り出そうとした女性たちの動きとフェミニズムには明確なつながりを見ることができる。

キーワード: イギリス第2波フェミニズム、女性の聖性、母系制社会研究グループ

Abstract: Feminism and religion can be deeply involved in the complex and diverse ways of life of women involved in religious concepts and experiences. This paper deals with the era of British second wave feminism in the 1970s and 1980s. The Matriarchal Study Group and the Greenham Common Peace Movement in the United Kingdom are taken as examples of new religious ways in which women have prompted the unique evolution of feminist beliefs. There is a clear link between feminism and the movements of women who have tried to create their own religious context while questioning the context of religious organizations.

Keywords: British second wave feminism, Female Sacrality, Matriarchy Study Group

1. フェミニズムと宗教

フェミニズムと宗教が相容れないものとする姿勢は長く続いてきており、互いに折り合いがつきそうにないのは現在でもあまり変わっていない。女性の生活の中の宗教の役割を無視しがちな世俗的フェミニズムは、組織化された宗教に反対し、宗教に関わるフェミニストを家父長制から抜けられない人たちとみなしてきた。そして、組織宗教はフェミニズムを軽蔑し、冒瀆的だと弾劾する。現代宗教を研究するドーン・ルウェリン (Dawn Llewellyn) は、こうした姿勢が女性たちの生活のなかに生きている宗教的现实、つまり女性のための変容とエンパワーメントの場所や源となっていることを見落としてしまうと指摘している。世俗化理論を過度に強調するフェミニズムは啓蒙思想からいまだ自由になっておらず、宗教的な概念や経験に関わる女性たちの複雑で多様な生き方を見逃しがちであり、また伝統

的宗教は、伝統から外れるものを無知、あるいは伝統を冒瀆するものと糾弾するだけに終わってしまうのである¹。川橋はこうしたジェンダーと宗教研究が二律背反とみなすことが「宗教を男性中心主義の砦の中に追いやり、魅力のないものにしてしまう」と指摘しているが²、それは既成宗教が変化を見せない限り、人々に寄り添うものとはなっていないことを予想させるものでもある。ルウェリンは、フェミニズムと宗教の分断は第3波フェミニズムにも受け継がれているとし、警鐘を鳴らしている³。

本稿では、イギリスを題材に第2波フェミニズムの時代に戻り、宗教的な組織の文脈に疑義を提示しながら自ら宗教的文脈を作り出そうとした女性たちの動きとフェミニズムとのつながりを示したい。イギリスの女性運動史のオーラルヒストリー研究家のマーガレッタ・ジョリー (Margaretta Jolly) の指摘する「女性解放運動の中でフェミニストの信念が独特な形で進化した」という、女性解放運動の中で女性解放運動とともに登場してきた女性の新しい宗教的な在り方の例として、1980年代のイギリスにおける母系制社会グループとグリーンナムコモン平和運動を取り上げてみたい⁴。

イギリスの第一波フェミニズムは1860年代に始まった女性参政権運動から第二波の台頭する1960年代までの約100年間に展開するさまざまなフェミニスト運動をさし、それに続くイギリスの女性解放運動は、1960年代末に始まり、70年代に栄え、80年代には多様なフェミニズムの登場による変遷を経ながら90年代に至るまでを第二波フェミニズムと呼ぶ⁵。そして、90年代以降を第3波フェミニズムと呼び、現代を第4波と呼ぶ場合もある。

「波」というたとえをフェミニズムの歴史の流れに用いることについては、疑問も呈されている⁶。つまり、第1～第4までの歴史的な区分は、時にその区分ごとに区切れがあるかのように、そして波がそれぞれの特徴を持ってまとまっているかのように、思わせる効果を持っている。そこから世代間の対立を過激に強調する結果を生み出したことや、微妙な思想的差異をないものとしてしまう点などを問題視されることもある。しかし、それぞれの区分には、それ以前とは異なる出来事があり、それをとってその時代の特徴とすることは分かりやすい。その点で「波」というメタファーはある意味で有用性はある。本稿では、「波」というたとえを用いて、しかし波がたった一つだけであったわけではないことに目を向けたい。第2波と呼ばれた活動の中で、その時代の波に遭遇した女性たちがすべて一つの目標に向かっていただけではなく、いくつもの異なる意見と目標のもとに小波のように複数の活動があったことは重要である。大きな波の合間に何を見ることができのかをイギリスの第二波フェミニズムの衰退期と呼ばれる1970年代後半から1980年代の動きについて、女神をシンボルとして持ち出した女性たちの動きをからめて考えてみたい。

2. 女性解放運動と第2波フェミニズム

第2波フェミニズムは、単なる平等な権利を求める闘争ではなく、女性の解放運動であるところとらえたところに大きな特徴を示す。1949年のボーヴォワールの生物学的性と社会構造としてのジェンダーの区別は、女性の抑圧の原因が何世代にもわたって形成されてきた社会的・文化的構築物にあるという、革新的な視点をもたらした⁷。

イギリスでは1960年代後半に女性解放運動（Women's Liberation movement）が始まったとされる。その女性運動史を表した今井は「70年代に栄え、80年代にはニューライトの台頭とともに衰退。90年代に復帰ないしは再生したといわれる」とまとめている⁸。この女性解放運動を担っていたのは、戦前から続く参政権をはじめとする法律上や社会上の制度の上での平等の獲得を目指したリベラル・フェミニズムと社会主義フェミニズムであり、さらにそこに、そうした法律や社会上での平等が作られたとしても、未だ差別が残っていることに注目し、その原因を他に求めようとしたラディカル・フェミニズムが加わったものとされる。ラディカル・フェミニズムは、法の平等がもたらされても、同じ権利の獲得運動をしても、その運動を担っている人々の中に性別役割が深く根付いていて、女性が男性と平等に扱われていないことに絶望的な気持ちになった。こうした性別役割観は女性の中にも浸透していて、その意識を変えることの必要性に気付いた人々が、ラディカル・フェミニストと呼ばれることになる。ラディカルとは、急進的というよりも、意識改革を含めた抜本的な変革がなければ、平等な社会はできない、という根本的な変革を意味していた⁹。

1970年に始まった女性解放運動全国会議が始まり、イギリス全土の様々な都市で開催されていった。最初に出された4つの要求は（1）同等の仕事に対する同等の賃金、（2）平等な教育と機会の平等、（3）無料の避妊と妊娠中絶、（4）無料の24時間保育園だった。1974年のエジンバラの全国会議では、（5）すべての女性の法的および経済的独立性、（6）自己定義のセクシュアリティ、レズビアンに対する差別の終結が加わる。そして、1978年のバーミンガム全国会議で、（7）男性の暴力の脅迫または使用による脅迫からのすべての女性の自由、男性の優位性と男性の攻撃を永続させる法律、仮定、制度の終焉の項目が追加される。この時、男性の優位性と、女性のセクシュアリティと暴力の経験が女性の抑圧の根源であると主張し、男性は敵であり、家父長制国家からは女性は何も得ることができないと主張する過激なフェミニストの発言も登場し、この全国会議は混乱に陥った。この後統一された女性運動の全国会議が開かれることはなくなった¹⁰。

しかし、バーミンガムの会議を最後に全国会議が開かれなくなったことが、そのままフェミニズムの分裂を意味するのではない。歴史学者のバーバラ・ケイン（Barbara Caine）の言葉を用いれば、むしろ、すでに単一のフェミニズムという概念が排他的なものとなり、複数のフェミニズムが存在するという多様性を認識することが必要となってきたこ

とを示したものに過ぎなかった¹¹。リーダーや階級制を持たず、固定することを必要としない手段や方法、そうした流動性ある運動は、とらえにくい。また、1980年代初期までの女性解放運動は大都市を中心としたものだったが、それ以降は地方都市へも広がっていった。拡散されていく中で、実際の活動では、リベラル・フェミニズム、社会主義フェミニズム、ラディカル・フェミニズムというレッテルにこだわらずに、必要となるものは活動に取り入れるという、人々の実際的な動きがあった。

さまざまな女性たちの活動をつなぐ要素が70年代の女性運動から登場したと考えられる。それは、女性たちの意識をつなぐ手法としてのコンシャスネス・レイジング(Consciousness Rising)、集まる場所として自宅の確保、情報を提供する機関としての女性の書店運動、情報を発信する手段としての安価な印刷法の登場である。

ラディカル・フェミニズムは、女性自身が抑圧されていることを意識的に認識するための手段としてコンシャスネス・レイジングを作り出した。小さなグループでの話し合いの中で、参加したすべての女性たちが順番にそれぞれ自分の生活の個人的な部分と考えていたことを話していくことによって、自分だけの問題だと思っていたことが、他の人とも共通していることに気づく。互いに共通する経験と抑圧を認識することによって、自分が置かれている状況を「個人的な問題」としてではなく、社会的に構築されている「社会的問題」として認識するようになる。そこではリーダーも上下関係もなく、自分を表現し、人の話を聞くことが続き、全員が話し終わると、互いの話を要約し、話し合い、分析する。女性たちはプライベートな体験や不安を共有することで、自分が一人ではないことに気づくだけでなく、より積極的になり、既存の価値観に挑戦することを学んだという。自分が抱えていた自分の問題が、社会の問題であり社会変革が必要であることに気づくと、活動へ積極的に参加するようになる。

女性たちの活動をつなぐ二つ目の要素が場所の確保である。コンシャスネス・レイジングの活動の多くは、参加者の女性の自宅で行われる。1980年代のサッチャー政権で行われた住宅法は、自宅を所有することを多くの人に可能とした。その結果、自宅は女性が安全に話をすることができる場所として、情報を交換する場所となっていった。それでも、自宅を持つ、自宅に自分用の個人的な空間を持ち、自分のために時間を使うということに対して罪悪感を持つ女性は多かった。そうした罪悪感を減らしていったのがコンシャスネス・レイジングであり、女性グループの存在だった¹²。

また、女性たちの活動を支えていた3つ目の要素として、書店運動と印刷方法を挙げることができる。当時の主要メディアである新聞や放送、雑誌などでは、フェミニスト運動が取り上げられることはほとんどなかったため、女性活動家たちの書いた書物やパンフレット、ポスターなどの流通をもたらす働きとして機能したのが女性解放運動を目的とした小さな書店だった。ヨーロッパとアメリカの書物の輸入は、英国におけるフェミニストの思想と活動の実践の展開にとって非常に重要だった。本や雑誌の流通をうながすと同時に、

書店の掲示板は、コミュニケーションのチャンネルとして、イベントを宣伝する低コストの方法を提供した。現代史学者のルーシー・デラップ (Lucy Delap) によれば、特に、フェミニストグループは流動的であったため、グループのメンバーやグループそのものも入れ替わることが頻繁に行われていた。そのため、書店は、情報交換とメンバー募集、および物理的な出会いの場として、安定した認識可能なネットワークポイントとして機能したという¹³。

4つ目の要素が、低コストの印刷技術の登場である。第2波フェミニストたちは、非公式の出版物を製作するのにコピーやオフセット印刷も利用したが、あらゆるフェミニスト非公式出版を考えたとき、謄写版印刷機は女性解放運動史においてある種の象徴的な意味合いを有している。いかなる本も新聞も、彼女たちが取り組んでいる問題に触れていなかったもので、こうした活動家たちは自分自身で仕事を作り出し、流通をうながす必要があった。実際、第二波の重要なテキストの多くは、第3波フェミニズムの特徴的活動手段の一つとなったジンとそう変わらないパンフレットやフライヤーからはじまっている。これらの文書は手作りされ、小規模に複製され、親密な状況で分かちあわれることで、女性たちが団結する助けとなった¹⁴。

第2波フェミニズムの中から登場してきたコンシャスネス・レイジング、自宅という場所、女性運動のための書店、低価な印刷技術、といった環境が整う中で登場してきた、女性のための宗教を考えるグループの一つが母系制社会研究グループ (Matriarchy Study Group) だった。フェミニズムが宗教からの解放を訴えた結果、伝統的宗教から離れていった人々がいるその一方で、女性解放運動の中から、宗教に対する新しい視点が生まれてきていたことを示しておきたい。

3. 母系制社会研究グループ (Matriarchy Study Group)

1975年、7、8人の女性が母系制社会の問題を議論するためにロンドンに集まった。このグループの創立の主要メンバーである、メアリー・コグヒル (Mary Coghil) は、ロンドンを中心にした Sisterwrite Bookshop を1978年に設立した一人であり、アスフォデル・ロング (Asphodel P. Long) は、重要な女性センターの一つ、A Woman's Place を運営するグループの一人であった。参加したほとんどの女性が、フェミニズム政治運動に関わっていて、母系制社会と女神信仰の問題はその延長線上にあると考えていた¹⁵。

グループの活動としては、読書会を何回か開き、その成果を発表する冊子を自分たちで作った。1977年には Goddess Shrew、Politics of Matriarchy、Menstrual Taboos を、1980年には、Matriarchy News を四半期ごとに出版することになった。その第1号には、グループの趣旨が次のように書かれている。

私たちは、人類学、考古学、歴史、詩、宗教、オカルト、癒し、科学を通して母系制

社会について話し合うために集まる女性のグループです。私たち全員が、自分たちの仕事を女性運動の政治の一部として、または女性の力と力の表現としてそれぞれが解釈しています¹⁶。

このグループが発行した情報誌からは、イギリスとアメリカのフェミニスト運動のネットワークの様子が見える。このグループは、様々な女性解放運動グループ、フェミニズムの書物、イギリスやアメリカの雑誌、そして個々のライター、たとえば、フェミニスト神学者であり女神運動の著作家であるマーリン・ストーン (Merlin Stone) のような人々ともつながっていた。そして、そうした考え方をイギリス中で、さまざまな女性会議でワークショップを開いたり、講演したり、スライドショーを見せることで広めようとしていた。

グループの活動は、国内外からの情報を得る点でフェミニスト書店の存在に支援され、またフェミニスト書店を後押ししていた。また、自分たちからの情報発信の手段としては、自らで行う出版物を用いていた。地元の女性運動の雑誌である *Shrew* や *Spare Rib* や、アメリカの *Womanspirit* に記事を投稿している。また自らの雑誌を編集し、*Womanspirit* の第1号では、読者に、この雑誌を国内はもちろん国外に持ち歩くように、勧めている。

1977年に、ロンドン母系制研究グループは、イギリスの女性運動雑誌 *Shrew* の *Goddess Shrew* というタイトルの特別号を出した。そこではその目的を次のようにまとめている。

かつて、女性が中心になって導いた文化に基づいて組織された社会があった。女神は、単に豊穡を祈る目的で崇拜されていただけではなく、女性性や女性が優れていると考えられていた生き方を示すものとして崇拜されていた。男性中心の宗教は女性を無意味化し、搾取する働きを持っている。我々が自らの身体のみならず精神をコントロールすることは社会の変革をもたらす可能性を広げる。¹⁷

イギリスの新聞紙「ガーディアン」にも小さな記事が載り、その後2週間の間に、アスフォデル・ロングの住所には、雑誌のコピーを求める手紙が500通以上届いたという。女性たちから送られてきた手紙を読んでいるうちに、同じ苦しみを持った女性たちの言葉からロングはユダヤ教徒として育ったが次第に離れたという自分の過去を振り返ることができたという。

私は自分が劣っていないことを常に知っていましたが、そう言う言葉を見つけることはできませんでした。私はいつも自分が汚れていると信じていました。月経血は私を不潔にすると言われていましたが、どういうわけか私は本当に理由が本当にわかりませんでした。今私はそれが嘘であることを知っています。・・・

神の一部として、そして男性と平等に神の中に、女性自身のアイデンティティを回復することは、命の息吹であると本当に理解することができます。・・・神を女性として命名すること、または少なくとも女性を神の一面として命名することは、特に世界

そのものに対する私たちの態度に大きな影響を与えます。¹⁸

ニュースは素早く大西洋を越えて広まった。ロングの個人通信では、グループの活動や記事を求めるアメリカのフェミニストからの手紙が多く残されている。1977-78の間には、ロンドン母系制研究グループと、マーリン・ストーン、シャーリーン・スプレトナック (Charlene Spretnak)、スターホーク (Starhawk) との間に手紙が交わされたことも分かっている。

その後、急激にメンバーが増えた母系制研究会は、すぐに変化を遂げる。研究を目的とする母系制社会研究グループとは別に、1981年、Matriarchy Research and Reclaim Network (MRRN)が設立される。ネットワークという名に表れているように、これは儀礼に焦点を当てることに主眼を置くグループ、芸術グループ、また地方の女性グループなどのさまざまなサブグループの活動をつなぐものであった。ひとつのグループとしてまとまることよりも、母系制社会の存在から生き方を問い直す女性たちの活動が、より緩やかに編成された種々のグループを連携することが最も好ましいと考えられていたことが次の言葉にうかがえる。

ロンドングループは現在、大きな変化、非常に前向きな変化を遂げています。最近まで、私たちは1つの大きなグループとして会議を開き、一度に勉強し、話し合い、祝いました。しかし、これはかなり無理があり、現在、さまざまな女性の利益を考慮してサブグループが形成されています。¹⁹

さらに、母系制社会が存在していたということがこれらのグループの誕生の発端となったものの、母系制社会の歴史的資料の欠如が明らかになってくるにつれて、母系制社会や女神信仰の存在する社会が女性を肯定し平和的であったことの確証を求めることは次第に女性たちの活動の目的ではなくなっていく。というのも、母系制社会の存在の可能性というアイデアがラディカル・フェミニズムと融合することによって、女性たちが自分自身を肯定する社会や宗教の存在の可能性に気づいていったからである。母系制社会よりもむしろ女神信仰へ、そして女性が自分自身を肯定できる宗教や儀礼を自分たちで作出すことへと変化していった。たとえば、母系制社会研究グループの創立に関わったロングのように、ユダヤ教徒の家庭に生まれたものの、家父長制的性格を嫌い宗教からは離れていたが、神学者でありカトリック教会を批判したメアリー・デイリー (Mary Daly) をはじめとする宗教を取り戻す (Reclaim) という考え方に会い、宗教を読み直し、見直すことにつながった例もある。

既成宗教の見直しという点において、グループに大きな影響を与えた一人は、スウェーデン生まれの画家で、アメリカやイギリスを行き来していたモニカ・スジョー (Monica Sjöo) である。彼女は、母系制社会研究グループの初期から参加し、パンフレットにも多く寄稿

している。スジョーは、1968年に「出産する神 God Giving Birth」を描き、神を黒人女性として、そして人類創造を人間の実際の出産として描いていた。出産の際に子どもが生まれ出るところとして女性性器が描かれたばかりか、産み出している黒人女性を神とみなした点で、画期的な作品となった。キリスト教会側は神を冒瀆するものとして非難をしたが、彼女は神を否定したのではなく、女性の視点から神を描いたのだと答え、その後も神を描き続けていく。古代からの女性の歴史を見渡して、宗教的・文化的な信念は最初に女性によって作られたとする彼女の主張は、母系制社会研究グループの Newsletter に見ることができる²⁰。

またスジョーは、女神の絵を描きつつも、女神の名前を唱え儀式をするだけでは充分ではないと考えていた。女神である大地は我々の周りで死につつあり、その娘たちはそこかしこで苦しんでいること、緑の革命が第3世界に貧困をもたらし、「貧困の女性化」が起きていることなど、現実の問題と関わらない女神信仰はありえないことを自分の問題として確信していた。スジョーの姿勢に代表されるように、女性解放運動をきっかけに始まった母系制・女神信仰を探る女性たちの宗教的希求は、生活すべてに関わり、儀式だけにとどまるものではなかった。スジョーを始め多くの母系制社会研究グループのメンバーがかかわった運動の一つに、生を尊ぶことのない家父長制社会への抗議活動としてのグリーンナムコモン (Greenham Common) の平和運動があった。

4. グリーンナムコモン平和運動

冷戦時代、イギリスに作られたアメリカ軍基地へのミサイル搬入に反対する運動が、女性を中心としたキャンプを作り出し、1981年8月に、「地上の命を守る女たち」の女性36人がカーディフから行進を始め、ミサイルが設置される予定の米軍基地のあるグリーンナムコモンに向かった。10日後に到着した女性たちは、そこに平和キャンプを設置することとなった。「子どもたちに不毛の大地と緩慢な死ではなく、未来を残すことに特別な責任を感じている」女性たちの運動は、当初は関心を持つ人も少なく効果のない運動とされていたのだが、この運動がその後20年近く続くとは参加した女性たちも思っていなかった。

1982年には、参加者による話し合いにより、女性だけのキャンプにすることを宣言し大きな話題になる。男性を含め女性からも反対の声はあがったが、キャンプにいる女性たちの強制排除が予測される中、非暴力を貫くためには女性だけの方が訴える力も大きいと判断され、その後昼間には協力する男性の参加はあったものの、19年間女性だけでキャンプは続けられていった。厳しい天候もある中で、キャンプでの生活は原始的なものであった。その辛い生活にも関わらず、この平和キャンプが続いたことには、さまざまな要因があったとされる。歴史学者のジル・リディントン (Jill Liddington) は、イギリスには女性によ

る平和運動の伝統があったことを強調する。「女性が平和運動に熱中する背後には往々にして軍国主義に対する圧倒的な恐怖感がある」、「平和運動を支えてきたのは圧倒的に女性だった。・・・それを無視するのは、英国の女性運動史がまさにそうであるが、歴史を誤らせることになる」という思いが著書を書かせ、女性による小さな平和グループによる活動は、1820年から何度も行われてきており、グリーンナムコモン平和運動もその一つなのだという²¹。

1982年12月、ヨーロッパに巡航ミサイルを配備するというNATOの決定の3周年として選ばれた日、インターネットや携帯電話が登場する前の時代に、女性とその支持者たちは広くメッセージを広め、当日3万人の女性がキャンプの周りに人間の輪を作ったことは、イギリス国内外に大きなニュースとなった²²。

この女性たちの平和運動が長く続いたことには、さらにいくつか要因が挙げられている。一つは、基地には複数の入場ゲートがあり、様々なグループが場所分けをして存在していたことである。最初に行進をしたグループはメインゲートで抗議行動を繰り返していたが、そのうちに大勢集まってくるにつれて、それぞれのゲートには異なるアイデンティティが作られていった。そして各ゲートの名前には虹色のひとつずつがつけられた。ターコイズ・ゲートにはニューエイジとビーガンの人々が、グリーンゲートにはレズビアンや、スピリチュアリティに関心のある女性たち、バイオレットゲートには、既成宗教とのつながりを持つ、身なりの良い女性たち、オレンジゲートには年配の女性や子供たち、イエローゲートにはペイガンの女性たち、といったように、それぞれの特徴あるグループが出来上がっていった。ただし、厳格な境界ができていたわけではなく、クウェーカー教徒はオレンジゲートやブルーゲートを行き来したり、カトリック教徒がどこかのゲートで聖体拝領をしたり、またスピリチュアリティに関心のない女性がグリーンゲートにいることもあったという²³。

イギリスの宗教学者であるクリスティーナ・ウェルチ (Christina Welch) は、グリーンナムコモン平和運動の中で、宗教的なシンボルが意味を持っていた側面を指摘する。グリーンナムコモン平和運動で使われた宗教的なシンボルは、さまざまな宗教、キリスト教やクウェーカー、ニューエイジ、ペイガン、魔女、アメリカやオーストラリアの先住民族のものなどを人々が持ち込んだもので、平和を象徴し、家父長制に抗議する目的で共有されていた。たとえば、イエローゲートでは、先住民のオーストラリア人がレインボーサーペントの神話を「普遍的に尊敬される神性」、人類の守護者、および月経周期のメタファーとして、あるいは「私たちが今も苦しんでいる現在の世界秩序を確立した家父長の英雄によって虐殺されたドラゴン」を表しているとも語られた。平和のハトやクモの巣などのシンボルは、創造と再創造の神話、特にノアの箱舟、北アメリカの先住民族のくもの伝説から取り入れた。また抗議行動をしていた女性たちが逮捕された際には、宣誓において「神に誓う」ことを拒否し、その代わりに「女神に誓う」と主張したという。また逮捕された女性たちを

応援するために女神の人形を毎回裁判所に持ち込んだ²⁴。

女神信仰と政治を組み合わせた運動を示したのは、芸術家のモニカ・スジョーと、アメリカの魔女として知られていたスターホークだった。彼女たちは、グリーンナムコモン平和運動を応援し、実際にその活動にも参加していた。そして運動の象徴の一つとして、ソールズベリー平原の軍事地帯を横切ってストーンヘンジまでの5日間の行進を行い、グリーンナムの女性たち約100人がそれに参加した。ソールズベリー平原は、新石器時代の塚とされ、その形から「しゃがむ女神」と呼ばれていたが、行進はストーンヘンジで満月を迎えるように計画され、参加者はこの「しゃがむ女神」のお腹の上に寝て、家父長制の抑圧からストーンヘンジを解放しようと訴えた。このエイブベリー地域は、ペイガンの魔女たちにとっても意味のある場所であった²⁵。

フェミニスト神学者メリッサ・ラファエル (Melissa Raphael) は、このグリーンナムコモン平和運動に見られたものは「女性の聖性」の新しい現れだったという²⁶。ジェンダー研究者であるサリー・マント (Sally Munt) は、そこにはレビアンのフェミニズム、緑と動物の権利運動、新興教 (ガイア、母なる地球)、カトリック (特にマリア崇拜)、アボリジニとネイティブアメリカンの精神性 (織り、虹蛇)、ウィッカ (スパイダー、異教、魔女)、クエーカー教徒 (平和の証人)、そしてロマン主義のそれぞれが女性の聖性」を、最も高めたという²⁷。

グリーンナムコモン平和運動は、行政・軍関係者・警察との戦いの日々でもあった。たとえば、イエローゲート一つをとっても、1990年の1年で、基地侵入などは軍側が記録しているだけで、1960件 (1日当たり5件以上)、基地のフェンス修理費だけで4万ポンド (約900万円) 基地に対する行動による逮捕件数も、6千件以上あったという²⁸。こうした苦しい闘いの中で女性たちを支えたものの中には、女性を力づける女性の聖性があった。サリー・マントは、グリーンナムコモン平和運動で作られ歌われた「魂は殺せない (You can't kill the spirit)」は、単なるひとつの歌ではなく、グリーンナムコモンの女性たちの信条であり、マントラであったと言う²⁹。女神の強調など、女性の聖性を訴える活動は、グリーンナムコモン平和運動の一部にすぎなかったものの、「特異な時期に、儀式、象徴、呪文は核基地外の女性の平和キャンプとしてのありそうもない存在を維持する上で重要な役割を担うようになった³⁰。

1991年、グリーンナム米軍基地からミサイルが撤去され、グリーンナムコモン平和運動は一応の終わりをみるが、2000年まで反核兵器運動としてとどまった女性たちもいた。

グリーンナムコモン平和運動は、軍隊や核兵器反対の運動だけにとどまらなかった。イギリスで最も活発なフェミニズム運動でもあり、参加した女性すべてが積極的に議論し、個人的な体験を共有した上で意思決定がされていたという家父長制に挑む経験の場でもあった。サーシャ・ローズニール (Sasha Roseneil) は、グリーンナムコモン平和運動がジェンダーの多様性とその共有の土地の権利とが交差した場所であったとし、グリーンナムコモン

平和運動は抗議活動だけだけでなく、そこにあったリーダーシップと権限の欠如は、家父長制の生活様式を覆し、すべての女性に発言権を与える一方で、各女性が自分の意識に従って行動できるようにする意図的な試みだったとまとめている³¹。

5. 終わりに

80年代の母系制社会をめぐる女性たちの活動や女神信仰と平和運動とのつながりなど、こうした活動は、女性性を強調する本質主義であるという批判や、白人中心の運動だったといった批判から逃れられるわけではない。その後の女性中心の女神信仰などに見られる植民地主義的傾向やオリエンタリズムへの批判は続いている³²。しかし一方で、マーガレッタ・ジョリーが指摘するように、こうした女性たちが女性の聖性や宗教を自分たちに取り戻そうとした運動は、その後マイノリティのグループに重要な視点を提供した点もあったことは重要である³³。

母系制社会研究グループを始めた一人のアスフォデル・ロングは、その後ロンドン大学の神学部で学び、後に大学でフェミニスト神学を教え、2005年にこの世を去っている。芸術家モニカ・スジョーは、女性運動に関わると同時に、女性芸術家のネットワークも作るなどしながら世界各地で活動をしていたが、やはり2005年にこの世を去った。

女性たちの多くの活動が組織化されず、さまざまな思想や運動が混在し、形としてその後に残らなかったように見える。しかし、第2波フェミニズムの中にはこうしたさまざまな動きがあったことが分かっており、そしてその動きは形を変えて続いていることは間違いないだろう。第2波とは、一つの大きな波が一度にやってきたわけではない。小さな波の数々が様々な場所で動き出し、遠くから見ると一つの大きな波に見える。しかも消えたように見える大きな波は、また次の小さな波としてあちらこちらに顔を出している。こうした組織的に連続性のない流動的な動きをどのようにとらえるかが常に課題として残っている。

フェミニズムの運動と宗教的世界観は連続していると考えられる人々の活動のひとつを見てきた。そうした人々を家父長制の宗教という古い価値観にとらわれているとみなすのも、宗教的伝統を汚す無知な人々とみなすことも、その人々の生活に近づくことにはならない。女性の生活の多くの側面を網羅するためには、多様な女性たちの経験を世俗的な用語で切り取ることなく、女性の個人的および多様な違いに注意を払う必要がある。そして宗教的、精神的なアイデンティティの多様な表現を考慮しながら対話し続ける姿勢は、フェミニズムと宗教が互いの進化を促す要因となる可能性を示すことになるだろう。本稿の一例は、双方からの批判的視点が互いの動きに影響を与えることを示していると考えられる。

注

1. Dawn Llewellyn & Marta Trzebiatowska, 'Secular and Religious Feminism: A Future of Disconnection?,' *Feminist Theology*, 21(3), 2013, pp. 244-258.
2. 川橋範子「宗教研究とジェンダー研究の交差点」『宗教とジェンダーのポリティクス』昭和堂、2016年、6頁。
3. Dawn Llewellyn & Marta Trzebiatowska, *ibid.*
4. Margaretta Jolly, *Sisterhood and After – An oral history of the UK women's liberation movement, 1968-Present*, Oxford UP, 2019, P.232
5. 今井けい『現代イギリス女性運動史 ジェンダー平等と階級の平等』ドメス出版、2016年。
6. アリスン・ピープマイヤー『ガール・ジン 「フェミニズムする少女たちの参加型メディア」』太田出版、2011年。 *Girl Zines; Media Doing Feminism*, by Alison Piepmeier, New York University, 2009.
7. 『フェミニズム大図鑑』ハンナ・マッケン著、最所篤子・福井久美子訳、三省堂、2020年、112-115頁。
8. 今井けい、前掲書。
9. 高島鈴は、「ラディカル」とは「過激な」という意味ではなく、「根源的な」「抜本的な」と訳すとし、「そもそも根元に男性支配が埋め込まれているのだから、すべてを「抜本的に」見直さねばならない。」ということであると再認識を求める。高島鈴「蜂起せよ、<姉妹>たち シスターフット・アジテーション」『文芸 2020 秋 覚醒するシスターフット』河出書房新社、2020年8月。
10. Florence Binard, "British Women's Liberation Movement in 1970s: Redefining the Personal and the Political," *French Journal of British Studies*, XXII- Hors série, 2017. (Electronic version, URL: <http://journals.openedition.org/rfcb/1688> DOI: 10.4000/rfcb.1688)
11. Barbara Caine, *English Feminism, 1780-1980*, Oxford, OUP, 1997, p.269.
12. Asphodel P. Long, *In a Chariot Drawn by Lions The Search for the Female in Deity*, The Crossing Press; CA, 1993.
13. Lucy Delap, 'Feminist Bookshops, Reading Cultures and the Women's Liberation Movement in Great Britain, C. 1974-2000', *History Workshop Journal*, Oxford UP, July 2015.
14. アリスン・ピープマイヤー『ガール・ジン』、72-78頁。
15. グループが発行した冊子 *Politics of Matriarchy* の巻頭の *Goddess Politics* にも、「このグループは、確固たる政治的基盤の上に設立された」と明記されている。Pat Whiting, "Goddess Politics," *Politics of Matriarchy* by Matriarchy Study Group.
16. *Matriarchy News*, No. 1, 1980.
17. *Goddess Shrew*, 1977.
18. Asphodel P. Long, *ibid.* p.180.
19. *Newsletter* by Matriarchy Research and Reclaim Network, 1981.
20. 1987年には、次の本にまとめられて出版された。Monica Sjoø & Barbara Mor, *The Great Cosmic Mother: Rediscovering the Religion of the Earth*, Harper & Row, 1987. 同じタイトルのオリジナル版は、1981年にノルウェーで出版された。Monica Sjoø & Barbara Mor, *The ancient religion of the Great Cosmic Mother of All*, Rainbow Press, Norway, 1981.
21. Jill Liddington, *Long Road to Greenham: Feminism and Anti-Militarism in Britain Since 1820*, Virago Press; London, 1989. (ジル・リディントン『魔女とミサイル—イギリス女性平和運動史』新評論、1996年。)
22. <https://feministarchivenorth.org.uk/?s=Greenham+Common>
23. Christina Welch, 'Spirituality and Social Change at Greenham Common Peace Camp,' *Feminist Theology*, Vol. 18(2); pp. 230-248. 次のルーシー・ロビンソンの体験談にもみられる。'IT DID GET TIRING TO WELCOME EVERYONE TO THE FIRE' – POLITICS AND SPIRITUALITY AT GREENHAM COMMON PEACE CAMP, by Lucy Robinson, *OBSERVING THE 80S HOME BLOG BACKGROUND*, Friday, November 8th, 2013.

24. Christina Welch, *ibid.*, pp. 234-5.
25. 女性解放運動がペイガンに与えた影響については、次の本に説明されている。Shai Feraro, *Women and Gender Issues in British Paganism, 1945-1990*, Palgrave Macmillan, Switzerland, 2020.
26. Melissa Raphael, *Theology & Embodiment; The Post-Patriarchal Reconstruction of Female Sacrality*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996, 23.
27. Sally Munt, “Queer Spiritual Spaces,” in *Queer Spiritual Spaces: Sexuality and Sacred Places*, ed. Kath Browne, Sally Munt, and Andrew K.T. Yip (Farnham, UK: Ashgate, 2010), p. 13.
28. グリーナムの女たち著『グリーナムの女たちの闘い 核ミサイルを止めた十年』オリジン出版センター、1992年、215頁。
29. Sally Munt, *ibid.*
30. Jill Liddington, *Ibid.* p.236.
31. Sasha Roseneil, “Postmodern Feminist Politics: The Art of the (Im) Possible?”, *The European Journal of Women’s Studies* Vol. 6: 161-182.
32. マヤは、白人女性たちが自分たちの女神のルーツを掘り起こすという運動が、人種、階級、セクシュアリティなどの差異を無視したロマンティズムに陥りがちであり、また見知らぬ文化の女神を無批判に取り入れることはオリエンタリズムにすぎないことなど批判している。Kavita Maya, ‘Engendering Difference: The (Post)colonial Politics of Goddess Spirituality,’ *Religion, Gender & Body Politics*, Utrecht University, 2015.
33. Margareta Jolly, *Ibid.*

参考文献

第一次資料

- Matriarchy Study Group
 Matriarchy News, No1-3.
 Goddess Shrew.
 Politics of Matriarchy.
- Matriarchy Research and Reclaim Network
 Newsletter, No. 1-No 31.

参考文献

- Caine, Barbara, *English Feminism, 1780-1980*, Oxford, OUP, 1997, p.269.
- Delap, Lucy, ‘Feminist Bookshops, Reading Cultures and the Women’s Liberation Movement in Great Britain, C. 1974-2000’, *History Workshop Journal*, Oxford UP, July 2015.
- Feraro, Shai, *Women and Gender Issues in British Paganism, 1945-1990*, Palgrave Macmillan, Switzerland, 2020.
- Florence Binard, “British Women’s Liberation Movement in 1970s: Redefining the Personal and the Political,” *French Journal of British Studies*, XXII- Hors série, 2017. (Electronic version, URL: <http://journals.openedition.org/rfcb/1688> DOI: 10.4000/rfcb.1688)
- グリーナムの女たち著『グリーナムの女たちの闘い 核ミサイルを止めた十年』オリジン出版センター、1992年。
- 今井けい『現代イギリス女性運動史 ジェンダー平等と階級の平等』ドメス出版、2016年。
- Jolly, Margareta, *Sisterhood and After – An oral history of the UK women’s liberation movement, 1968-Present*, Oxford UP, 2019.
- 川橋範子「宗教研究とジェンダー研究の交差点」『宗教とジェンダーのポリティクス』昭和堂、2016年。
- Liddington, Jill, *Long Road to Greenham: Feminism and Anti-Militarism in Britain Since*

- 1820, Virago Press; London, 1989. (ジル・リディントン『魔女とミサイル—イギリス女性平和運動史』新評論、1996年。)
- Llewellyn, Dawn & Trzebiatowska, Marta, 'Secular and Religious Feminism: A Future of Disconnection?,' *Feminist Theology*, 21(3), 2013.
- Long, Asphodel P., *In a Chariot Drawn by Lions The Search for the Female in Deity*, The Crossing Press; CA, 1993.
- マッケン、ハンナ『フェミニズム大図鑑』、最所篤子・福井久美子訳、三省堂、2020年。
- Maya, Kavita, 'Engendering Difference: The (Post)colonial Politics of Goddess Spirituality,' *Religion, Gender & Body Politics*, Utrecht University, 2015.
- Munt, Sally, "Queer Spiritual Spaces," in *Queer Spiritual Spaces: Sexuality and Sacred Places*, ed. Kath Browne, eds. by Sally Munt, and Andrew K.T. Yip, Farnham, 2010.
- ピープマイヤー、アリスン『ガール・ジン 「フェミニズムする少女たちの参加型メディア」』太田出版、2011年。(*Girl Zines; Media Doing Feminism*, by Alison Piepmeier, New York University, 2009.)
- Raphael, Melissa, *Theology & Embodiment; The Post-Patriarchal Reconstruction of Female Sacrality*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996.
- Roseuil, Sasha, "Postmodern Feminist Politics: The Art of the (Im) Possible?," *The European Journal of Women's Studies* Vol. 6: 161-182.
- Sjoo, Monica & Mor, Barbara, *The Great Cosmic Mother: Rediscovering the Religion of the Earth*, Harper & Row, 1987. (Monica Sjoo & Barbara Mor, *The ancient religion of the Great Cosmic Mother of All*, Rainbow Press, Norway, 1981.)
- 高島鈴「蜂起せよ、<姉妹>たち シスターフット・アジテーション」『文芸 2020 秋 覚醒するシスターフット』河出書房新社、2020年8月。
- Welch, Christina, 'Spirituality and Social Change at Greenham Common Peace Camp,' *Feminist Theology*, Vol. 18(2).